

茶の湯文化学会会報

No.92

第92号 / 2017年3月27日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

東京国立博物館 特別展「茶の湯」について 三笠 景子

今春、東京国立博物館において特別展「茶の湯」が開催される（於平成館、平成二十九年四月十一日（火）～六月四日（日））。日本文化の象徴ともいべき茶の湯の歴史的展開について、遍く概観しようという試みはじつに三十七年ぶりのことである。

その三十七年前の一八八〇年（昭和五十五）、東京国立博物館で開催された特別展「茶の美術」は出品総数が四百件近くにのぼった大展覧会であった。そして、それまで茶の湯の世界のなかにあった道具を日本の美術、文化遺産としてとりあげ、その歴史のなかに価値づけた初の展覧会でもあった。

その後、茶の湯に関する研究は建築、美術、考古学、史学といった各方面から積極的に行われてきた。その一方で、この四十年ほどのあいだにも社会や文化の変化は著しく、茶の湯に対する人々の認識も変わっていきように思われる。

二十一世紀もしばらくが過ぎ、再び東京でオリンピック開催の気運が高まるなかで、いま一度、東京国立博物館において大規模に「茶の湯」をとりあげ、日本の美の真髄にふれることは大きな意義があるであろう。

ここで展覧会の概要にふれておく。

本展覧会「茶の湯」は総数およそ二六〇件にのぼり、内容は五つの章から構成される。茶の湯の萌芽期である室町時代から、近代まで、長きにわたる茶の湯の展開をその貴重な美術作品からたどるものである。

まず第一章では「足利將軍家の茶湯―唐物莊嚴と唐物数寄」として、室町時代の最高権力者である足利將軍家の所蔵品を中心に、唐絵、唐物の第一級品から茶の湯草創期の様相に迫る。

この時期の茶湯道具を象徴するものとして、足利將軍家にお

いて、建蓋の第一位、「世上になき物」と評された「曜変」や、それに次ぐ「重宝」と評された



「紅白芙蓉図」(白) 李迪筆 中国 南宋時代
展示期間 5月23日～6月4日

「油滴」が挙げられる。

日本に数多く伝世する中国福建の建窯で焼かれた喫茶碗、いわゆる建蓋の類のうち、足利將軍家が所持したという確かな伝承はそなえたものは現在のところ見つかっていない。しかし、今回の展覧会に出品される「曜変天目 稲葉天目 展示期間四月十一日～五月七日」(静嘉堂文庫美術館)や「油滴天目」(大阪市立東洋陶磁美術館)は、ともに釉に偶発的に現れた斑文の美しさは比類なく、まさに最上級の建蓋といえる。

一方で、「東山御物」つまり足利將軍歴代のコレクションの伝承を持つ天目がある。將軍家の唐物の規定書『君台觀左右帳記』には「上(將軍家)には御用なき物」と記された灰被天目である。建窯の影響を受けて、福建の別の窯で焼かれたと考えられるもので、曜変や油滴に比べると釉は薄く、焼き歪みがあつて粗相な姿をしている。

しかし釉にキラキラと光るなだれがあつて、独特の風合いをみせるのが灰被天目の魅力であろう。唐物のなかでもこのようなものにも眼が向けられ、茶湯道具として見いだし、とりあわせることが「教寄」の心のあらわれといえる。

第二章は「侘茶の誕生―心になうもの」

というテーマで、この「教寄」の茶、つまり日常の身近なものから、自らの心、そして眼になうものを取りあげる新しい茶風が興隆する様子を、茶人珠光(一四三三～一五〇二)や武野紹鷗(一五〇二～一五五五)にまつわる貴重な道具からたどる。また、室町から安土桃山時代にかけて茶の湯が町衆や武將のあいだで広がってゆくなかで、「教寄」の眼と心で新たに評価されるようになった唐物茶入や高麗茶碗、禅林墨蹟、釜の名品を紹介する。

続く第三章では「侘茶の大成―千利休とその時代」として、侘茶の大成者であり、織田信長、豊臣秀吉と天下人の茶頭に昇りつめた千利休(一五二二～一五九二)にまつわる道具を展観する。

本展覧会では千利休をとりあげるにあたり、利休の茶を大きく二つの側面からとらえようと試みた。その一つは「利休がとりあげたもの」。例えば利休好みの表具で整えられた墨蹟や、「小壺」と称されるより小さな唐物茶入、ほかに美濃で焼かれた茶碗、花入などが挙げられる。それらは華やかな伝来を持つものではなく、それぞれの造形も特別力強かったり、風雅な雰囲気漂わせたりする

ものでもない。当時の茶の湯者にとつてもごく身近にあつたのではないかと思わせる、一見素朴なものばかりである。

一方で「利休が創造したもの」という側面から作品に注目してみると、例えば黒漆塗の道具や楽茶碗、瓢や竹、籠の花入など、創意をうかがわせるものが多くみられる。とくに、手捏ねによる長次郎の楽茶碗は手にすっぽりと収まり、その存在を忘れるかのような究極の重さ、形である。このような利休の道具観にふれたうえで、改めて「利休がとりあげた」道具を振り返れば、その存在意義や個々の造形が際立っていることがわかるであろう。

また、利休没後の様相として、古田織部(一五四四～一六一五)、織田有楽斎(一五四七～一六二二)、細川三斎(一五六三～一六四六)の茶をとりあげる。とりわけ利休の近くにあつてその精神を継承しつつ、独自の茶風をもって武家の茶を牽引した織部の道具は、気骨ある心を映すようなダイナミックな姿かたちの名品揃いであり、それは同時代のいわゆる桃山茶陶と呼ばれる和物のうつつの造形に通じている。

展覧会後半、第四章では「古典復興」と題し、茶人小堀遠州(一五七九～一六四七)と

松平不昧（一七五一〜一八一八）の茶をとり

あげる。江戸時代になり、太平の世において茶の湯は変化の時代を迎えた。足利將軍家以来の武家の茶を復興しようとする徳川將軍家や、それをとりまく大名家の動きがあり、さらに利休の精神を継承して家元を確立する動きや、公家の雅な世界をとり入れて新しい茶風を創ろうとする動きなどがあり、それらが相互に影響を及ぼしあっていたのである。

そこです、平安の貴族文化に礎を置く復古的精神に基づきながら「きれいなさび」と称される新たな茶風を確立し、武家の茶を復興した小堀遠州にまつわる道具を中心に、江戸時代前半の茶の湯を展観する。また、遠州の時代を映すような古染付、祥瑞、高麗茶碗など注文で焼かれたと考えられるうつわや、京で生まれた仁清の色絵のやきものなど、雅びな茶陶もあわせて展示する。

後半では、遠州に倣い、古典をたどり、鋭い眼で名器を蒐集し、江戸後期における茶の湯の再編、再興につとめた松江藩主松平不昧にまつわる道具や、千家と交流を深めながら、豊かな財力を背景に独自の茶の湯を展開した三井や鴻池、関戸という名だたる豪商が所蔵した名品にも注目し、江戸時代の茶の湯を多

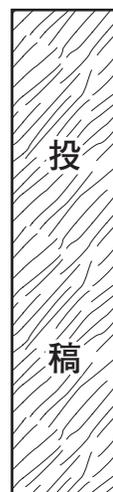
角的にとりあげる。

最後に第五章では「近代数寄者の眼」として、明治、大正、昭和にかけて活躍した実業家の茶の湯を紹介する。明治維新の混乱期、寺院や旧家から宝物や茶湯道具が一斉に世の中に流出するなかで、日本の東西において経済界を牽引した平瀬露香（一八三九〜一九〇八）、藤田香雪（二八四一〜一九二二）、益田鈍翁（一八四八〜一九三八）、原三溪（一八六八〜一九三九）ら実業家たちは、茶の湯の伝統を学びつつ、古筆や大和絵、仏教絵画などの日本美術の名品を新しい視点で茶席にとりこみ、各界の名士たちと茶会を重ねることによって、形骸化しつつあった茶の湯の幅を大きく広げることには貢献したのである。

彼らの眼と新しい美意識は、大正から昭和にかけて、畠山即翁（一八八一〜一九七二）ら次代の数寄者に引き継がれた。そして近代数寄者の精神を映した個性豊かな美術作品は、貴重な茶の湯コレクションを有し、公開活動を行う各美術館・博物館または新たな数寄者へ託されて、現在に至る。

一九八〇年に開かれた特別展「茶の美術」では、近代という時代区分はとりあげられなかった。「近代数寄者の眼」は、文化の真髄であ

る「茶の湯」をどのように継承し、未来へ伝えてゆくべきかという大きな宿題を我々に課している。本展覧会を通じて、改めて茶の湯の美術が内包する日本美とその歴史的意義について感じ取っていただけたら幸いである。



佛隆寺の茶臼

沢村 信一

佛隆寺は、奈良県宇陀市榛原赤埴にある真言宗室生寺派の寺院であり山号は摩尼、本尊は十一面観音である。創建は、嘉祥三年（八五〇）に空海の高弟・堅恵けんゑによるとされるが、それ以前に奈良興福寺の修円しゆゐんが創建したとも言われている。寺院内に、開祖堅恵の入定所といわれる石室（重要文化財）や、樹齡千年におよぶサクラがあり、觀光名所となっている。茶関係では、空海が唐から持ち帰った茶種を栽培したといわれ、大和茶発祥の地とされている。さらに空海が持ち帰ったとされる茶臼が伝来する。今回、この茶臼をみる機会を得たので報告する。

茶臼の素材は、花崗岩であり、上臼径17・0cm、高さ17・5cmであり、縦長を感じ

させる。寸法は、大西の著作より引用した。茶臼の磨り面は、八分画で溝14―15本、周縁平滑型である。挽き木座は正方形であり、挽き木座飾りは、菊花紋に菊の葉を重ねた独特の模様である、挽き木座の裏面には獅子の浮き彫りがあつて装飾に富んだ茶臼である。下臼の受け皿は円形で、茶の吐き出し口はなく、二箇所に取っ手がある。上臼の一部が欠けており、金継ぎによつて補修されている。

この茶臼は、空海が持ち帰つたという伝承のため、成書や文献などに紹介されているが、製作の時代に関してはよく分かつていない。



佛隆寺 茶臼

一、素材

茶臼の素材は花崗岩製であるので、産地は国内であり、製作時期は江戸時代以降と推定される。唐臼は、国内で数臼確認されているが、基本的に玄武岩系の輝緑岩製であつて、

花崗岩製のものは見当たらない。花崗岩は、茶臼の素材として硬いために、国内で茶臼に利用されるのは江戸時代以降と考えられる。ただ、北陸地方では中世の茶臼でも花崗岩製のものがあるが、地域性を考慮すると江戸時代以降と考へて間違いない。この茶臼の素材に関して、川勝は砂岩製、大西は輝緑岩としている。茶臼の外表面は変色しており、一見輝緑岩に見えるが、磨り面はきれいであり、明らかに花崗岩である。

二、磨り面

茶臼の磨り面は、八分画であり、溝が14―15本であることから、比較的新しい製造年代をうかがえる。中世の茶臼は、技術的に未熟であり、溝の本数がこれより少ない傾向にある。周縁平滑型の茶臼であることから、製作

は元禄時代以降と推測される。中世の茶臼は、切線主溝型といい、周縁部まで溝を切つてあつたが、周縁部の溝が浅いあるいは無い方が微細に粉碎されることから、経験的に周縁部が平らになつた時期が元禄期である。これは、周縁部の溝が深いと粉碎が粗くなることによるためであり、周縁部が平らな方が良いということではなく、結果として、周縁部分の平らな方が微細に粉碎できるとなつてし

まつたようだ。

また、磨り面の再加工に関しても考えられるが、平滑部分にまったく溝の跡が確認できないことから、当初から周縁平滑型として作られたと考えられる。

三、挽き木座および装飾

挽き木座の形状は、桐山によれば丸から四角、さらに菱形へ変化していった。これは、挽きやすさを求めての変化と考えられる。丸より四角の方が、挽き木が抜けにくいため、あるいは四角より菱形の方が挽き木の固定がしつかりするための変化として妥当なところである。

挽き木座の装飾は、菊花紋であるが、これに菊の葉と思われる模様が重なつている。菊花紋は、初期の茶臼に見られ、挽き木座の装飾は徐々に簡便なものへ変化していった。また、挽き木座の反対側には獅子が浮き彫りとなつており、全体として華美な装飾を印象付ける。挽き木座の紋に関して、川勝は菊花、大西は牡丹としているが、これは表現上の違いで同じものを指していると考ええる。

四、下臼

下臼の受け皿は、丸型であり、茶の吐き出し口がなく、取っ手が二つ付いている。この形式は古い茶臼に見られるものである。また、

下臼の裏面にある芯棒の差込穴は、非常にきれいに彫っており、穴の径より少し大きくらいである。古い茶臼では、芯棒の差込穴は、裏面に広く彫ってある場合が多い。これは、下臼の重量を軽減する効果を狙っているのかもしれない。いずれにしても、この芯棒の差込口の彫り方は珍しいものである。

これらの結果を元に、この茶臼の生産国と時代の推測をしてみた。素材からは江戸時代以降で国産、磨り面からは元禄期以降と推測される。挽き木座の形状や装飾、あるいは模様、下臼の形状からは中世を感じさせる面はあるが、一七〇〇年以降に製作されたものと考えられる。

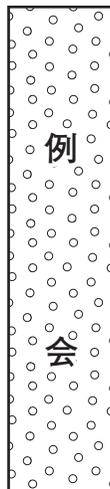
この茶臼は使用された形跡が無く、とてもきれいな状態で保存されていた。上臼や磨り面と装飾や下臼からの情報の乖離は、この茶臼が使用を目的として作られたものではなく、佛隆寺への寄進を目的として作られたと考えられる。今回、磨り面のふくみを確認できなかったが、使用の形跡が無いことや、上臼の特異な模様からも、抹茶を挽くという使用を目的としたものより、佛隆寺に空海伝来の茶臼が存在するということを目的として寄進されたものと考えられる。

寺伝では、空海が唐から持ち帰ったとなっているが、空海と茶の関係は史実として間違いないであろうことから、その高弟である堅恵が創建した佛隆寺では、茶の種や茶臼も同時に持ち帰ったと考えた人が居たのであろうことは想像できる。その考えが定着して行き、寺伝に加わることによって、現在まで受け継がれてきたのである。また、そのような寺伝があることによって、江戸時代中期以降に寺伝に沿ったような茶臼があった方が良くと考え、その時代に合致した茶臼を製作して佛隆寺に寄進したと考えるのが妥当である。使用した形跡がないことから、上記の考え方が合理的である。

結果として、佛隆寺の茶臼は、寺伝に沿ったかたちで江戸時代中期以降に製作寄贈されたものと考えられる。

- 参考図書
- ・室生寺の茶臼、川勝政太郎、茶道月報、9-11、3月号、昭和28年（1953）
 - ・石臼再発見（2）、大西市造、粉体と工業、62-67、8、1974
 - ・美術史・民具学・考古学における茶臼研究、桐山秀穂、野村美術館研究紀要、65-90、21、2012

・平滑周縁型茶臼について、沢村信一、茶の湯文化学会会報、83、2014



東京例会

（平成二十八年十一月十九日）

「渡辺驥と明治東京の茶」

依田 徹

渡辺驥（中洲、無物庵）は、これまであまり知られていなかった茶人である。『八百善茶会記』により幾つかの情報が補足されたことを機に、渡辺を中心に当時の東京の状況について考えてみたい。

渡辺は旧松代藩士であり、佐久間象山の門人として久坂玄瑞、中岡慎太郎ら維新志士の影響を受ける。慶應二年（一八六六）に藩を出て、岩倉具視の支持で倒幕運動に貢献、維新後は司法官となり、大審院検事長などを歴任した。確認される渡辺の最初の茶会は、明治十三年十一月十六日となる。明治十年代の東京の茶席では、多くの茶会で正客をつとめ、しかも盛んに講釈をしていたという。明治十六年十二月に茶室「無物庵」を新築したようであり、これ以降は『八百善茶会記』に渡

辺無物庵」と表記されるようになる。茶室の間取りは二畳台目で、額は有栖川宮職仁親王が揮毫していた。

明治十九年になり、渡辺は有名な小堀家の道具を買い取った。二箆筒、五長持、品数一五二点とされ、価格は四千円であったとされる。その中には、小堀家の家宝である清拙正澄「平心」墨跡、瀬戸茶入「在中庵」など、重要な道具が含まれていた。渡辺は明治二十九年六月に六十七歳で死去し、死の一月前に星岡茶寮で売り立てを行っている。日清戦争の賠償金による好景気により、十年前より値段が大きく上昇し、「平心」墨蹟単独で二千円となっていた。

「栄西のもたらしたもの

— 袈裟と茶堂を中心に —

岩間 眞知子

栄西の『喫茶養生記』は、密教医学に基づいて書かれたとする意見があり、表向きは確かにそうである。だが茶と桑を選び養生を説く栄西の真意は禅の普及にあると考え、栄西が中国からもたらしたものから、その真意を探ろうと試みた。

これまで栄西のもたらしたものを、具体的

に考察した研究はなかったため、『興禅護国論』などの文献と遺品から、「栄西が将来したものについて」(大阪府立大学『人文学論集』第三四号)と「日中交流からみた僧・栄西」(『衣帯水』玄号)として、もたらしたものを列挙した。

もたらしたもののうち袈裟(僧伽梨—大きい袈裟)は、栄西が中国で師の虚菴懷敏から師資相承の証として受け取り、日本で批難されても、天台宗などのものではなく「大国の法服を用ふべし」と中国禅宗のものを用いた。

茶堂は、栄西開基の建仁寺の遺構を示す「東山往古之図」(室町時代初期)や、孫弟子・円爾開基の東福寺の室町時代の遺構に見える。東福寺では創建当初、茶堂を大舎堂と称し、大舎堂は栄西の逗留した宋の天台山万年寺にあった(『大宋諸山図』)が、その名称は經典や漢籍には見えない。茶堂は、宋の『北苑別録』では茶の製造場、明の『関中奏議』では茶を扱う場、詩では禅宗寺院内の建物として見え、そのほかはみな唐代以降の日中の禅籍にあり、密教典籍には見出せない。

栄西の二度目の帰国時に經典類の請来記録はないが、禪が迫害を受けた当時の状況から、

『興禅護国論』に見える『禅苑清規』などの禅籍をもたらしたが、記録に残さなかったのではないだろうか。これまでも拙論で述べてきたように『喫茶養生記』の茶と桑の選択には、禪があると考ええる。

近畿例会

(平成二十八年十一月十二日)

「天目釉の再現

— 禾目天目と二種の油滴天目 —

岩田 澄子・岡崎 友紀

田口 肇・横山 直範

唐物天目は、点茶法の茶が流行した宋代に大量に焼成された黒釉茶碗で、最大の名産地は建窯(福建省)である。京都市産業技術研究所では、中国科学院上海硅酸盐研究所が行った中国各地の窯跡から出土する黒釉の陶片の組成分析結果をもとに、釉組成を現在の原料に置き換え、化学組成や焼成条件を検討して釉薬の再現実験を行っている。

これまで、禾目天目の斑紋は釉薬の流下紋様で、油滴天目の斑紋は酸化鉄による釉薬の発泡により生ずると説明されている。それに対し本発表では、文献・伝世品・発掘調査を参照しながら、実験を通して、禾目天目と二

種の油滴天目の釉薬について検討した。

(1) 『君台観左右帳記』

室町將軍家で使われた『君台観左右帳記』

は、唐物天目研究における第一級の資料である。「土之物」に記された各種「曜変・油滴・建盞（＝禾目）・烏盞・鼈盞・能皮盞・天目（＝灰被）」は産地順と考えられ、胎土の色に注目して吉州窯（江西省）は建窯製とは異なることと認識していること（「天目の土にて」）は注目に値する。

(2) 建窯系（曜変・油滴・禾目）

釉薬成分をみると、建窯系の組成は他の黒釉と比べて釉薬成分のアルミナ値が特に多く、シリカ値が比較的少ない組成である。

焼成条件を検討した結果、建窯のどの組成でも一三二〇度まで酸化で昇温し冷却時に還元焼成を行うことで禾目斑が再現できること。さらに、平均的組成よりアルミナ値やアルカリ値が多くなった場合に得られた禾目斑が油滴斑になることが分かった。

これらの禾目組成と油滴組成の焼成条件を検討した結果、一三二〇度の冷却還元焼成で得られた禾目斑をさらに再焼成を行い、冷却時に強還元雰囲気にするか、あるいは昇温時から冷却時まで炭化焼成雰囲気することに

より、シリカ成分の少ない組成では輪郭の明白な油滴斑が得られ、多い組成では輪郭の不明確な油滴斑が得られた。

さらに、二度目の炭化焼成の還元濃度により、禾目斑が斑紋のない黒釉や光彩をもつ曜変斑に変化することも分かった。

(3) 建窯系の油滴と北方系の油滴

日本に伝世している油滴は、大阪東洋陶磁美術館の油滴（国宝）のような建窯系だけではない。北方系（中国華北地方）の油滴もあり、津田宗及の寄進とされる大徳寺龍光院の油滴（重要文化財）がこれ相当する。

再現実験の結果、北方系の油滴は従来の定説どおり、酸化鉄の分解による発泡痕に偏析した酸化鉄によるもので発泡油滴といえる。一方、建窯系の輪郭が明白な油滴は、冷却還元後、炭化焼成を繰り返すことにより、ガラス中で相分離が生じ酸化鉄が析出し油滴となったものといえる。

以上のように実験を通して、釉薬成分や焼成条件の違いにより生じる、二種類の油滴発現のメカニズムが考えられる。

ところで、茶の湯では「曜変」として伝世した油滴があり、「曜変天目 堺油屋浄祐所持」の箱書をもつ名物（徳川美術館蔵）の美

態は北方の油滴である。茶の湯資料に記される「曜変」は、解釈の際に注意であるといえる。

「白醉庵・吉村観阿の生涯―苦楽と夢楽―」

宮武 慶之

吉村観阿（白醉庵／一七六五―一八四八）は江戸時代後期に江戸で活躍した町人数寄者である。観阿の行状で著名なことは出家に際し俊乗坊重源（一一二一―一二〇六）による「法華勸進状」を東大寺に寄進したこと、八十賀に際し原羊遊斎（一七六九―一八四五）に依頼して一閑桃之絵細巻を百二十五個作成し知友に配ったことである。このほかの行状について資料の不足から明らかにされてこなかった。従来、観阿は道具目利きとして著名であり、不味との交流では奇茶人としてしばしば紹介されるが、果たしてそれが観阿の正体なのであろうか。

観阿の墓は東大寺のほか弘福寺、福泉寺にあった。墓碑には松江藩七代藩主松平治郷（不味／一七五一―一八一八）から扁額を貰ったこと、観阿のもとには新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九―一八五八）をはじめとする多くの人物が出入りしたことが述べられている。この点から観阿と不味、翠濤

との交流について論じた。

調査により観阿八十賀の茶会記（個人蔵）を確認した。また茶会当日、披の間で使用された掛物は狩野山楽画三宅亡羊賛「福祿寿」（個人蔵）であった。このほか観阿作共筒茶杓銘「山雀」（個人蔵）、観阿が溝口家に取次いだ「祥瑞鳥摘茶器」（個人蔵）など新出の資料を確認した。

発表では観阿の生涯について新出の資料を用い、不昧と翠濤との交流、一閑桃之絵細藁と八十賀茶会の関係、寺院への寄進、道具の取次ぎを中心に論じた。



東京例会

平成二十九年四月二十二日（土）午後二時～

（会場：五島美術館）

「貞明皇后の茶道具について」 依田 徹

「大野鈍阿について」 門井 睦美

平成二十九年七月二十二日（土）午後二時～

（会場：五島美術館）

「美濃窯における

織部茶人の定義と評価（仮）」内田昌太朗

「茶の湯」展開催の意義と今後の課題」 三笠 景子

東海例会

平成二十九年四月二十二日（土）午後二時～

（会場：名古屋文化短期大学）

「平重盛伝来の箱書を持つ」

内金張茶碗と馬蝗絆」 岩田 澄子

平成二十九年六月二十四日（土）午後二時～

（会場：名古屋文化短期大学）

「未定」

西田 宏子

北陸例会

平成二十九年四月十五日（土）午後二時～

（会場：鯖江市文化の館図書館会議室）

「京都東山西行庵・宮田小文法師

新史料について」 岩原 正吉

平成二十九年五月十三日（土）午後一時半～

（会場：福井県越前陶芸村）

「越前古窯拠点施設（仮称）

建設工事現場見学」 吉江 勝郎

金沢例会

平成二十九年四月九日（日）午後一時半～

（会場：近江町交流センター）

「金森宗和に付いて」 谷 晃

高知例会

平成二十九年六月二十五日（日）

午前十時～正午

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

「茶の湯文化学会二十九年大会の

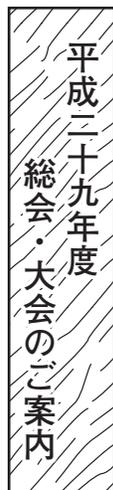
研究発表をテーマとしたシンポジウム」

軽食茶事 正午～十六時

席主 四名

会費 千円

※参会希望者は予め連絡をして下さい。



平成二十九年年度総会・大会は、京都において左記の日程で現在計画中です。

詳細は四月中旬に、別途ご案内いたします。

平成二十九年六月十日（土）総会・大会

懇親会

十一日（日）見学会